慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Brian Harrison ; South East Asia : a Short History, 1954(2nd ed. 1963 London), 「東南アジア史」, 竹村正子訳, みすず書房, 1967
Sub Title	
Author	唐木, 圀和(Karaki, Kunikazu)
Publisher	
Publication year	1973
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.16, No.4 (1973. 10) ,p.165- 170
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19731030-03959055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔書　評〕

Brian Harrison ; South-East Asia : a Short History, 1954 (2nd ed. 1963, London)

(「東南アジア史」(竹村正子訳), みみず書房, 1967)

(一)

現代の空飛ぶ絨毯に乗って，例えば，テヘランからボンベイ，そしてバンコクへと飛んでみよう。寄港地ごとに現地の労働者が機内の掃除にやってくる。彼等の顔立ちを見ていると，アラブ人の肉太な鼻，アーリア人系の端正な目鼻立ち，そしてバンコクに至って扁平な親しみ深い容貌があらわれてくる。南アジアのインドと東南アジアの間には，人種的なちがいとともに，どうもわれわれ日本人にとって，親近感という感覚上のちがいがあるようである。われわれの祖先と文化の一部が東南アジアに源を発する海上の道を辿ってこの島へやってきたことを想うとき，その感覚は根拠のないものではない。だが，東南アジアの人々にとっては，インドと日本とどちらが近しいかは，一概にいえないであろう。東南アジアの遺跡や文化にのこるヒンズー文化のあとを見るとき，また，東南アジア経済においてインド人が果してきた役割を知るとき，東南アジアはまさしく，南アジアと東アジアに囲まれた一地域であることが，あらためて認識されるのである。

感覚的な議論をはなれて，東南アジア地域を組識的・科学的に研究する場合には，まずその地域の歴史を知ることが，すべての分野での前提となるであろう。それは，東南アジアの経済発展という問題を考える場合も例外ではない。近代化 (modernization) が西欧諸国との接触によりひきおこされ，その目標が西欧の諸制度や価値概念を取り入れることにあるという見方，すなわち，近代化は，西欧化 (westernization) に等しいという見方は，東南アジアのある一時期には妥当するかも知れないが，通史に対する知識の欠如から来る偏見にすぎない。これに反し，J・A・ホブソンは，「帝国主義 —— 一つの研究」第2部第5章で次のように述べている。「アジアには，我々自身の文明と同様に複雑であり，我々の文明よりさらに古く，そして……永くつづいてきた習慣に根をおろした文明をもつ，おびただしい数の人民が住んでいる。アフリカの諸種族は，これを野蛮人もしくは子供，アングロサクソン族を先頭とする文明に沿った進歩において『後進的』であり，ヨリ先進的な民族の援助を必要としているとみなすことができた。インド，中国及びその他のアジア民族に対する西欧の支配に対し，同じ理由に基いてもっともらしい口実を設けることは容易ではない。比較的最近の自然科学の発達と，その産業的技術への応用を除けば，これらの民族が『後進的』であると主張することはできない」(J. A. Hobson, "Imperialism, a study", London, George Allen & Unwin Ltd. 1902〔邦訳：矢内原忠雄訳「帝国主義論」(1948年原著第4版の訳), 1951, p. 211〕)

アフリカ人を一括して野蛮人とみなす点には賛意を留保するとしても，ここでは，非西欧諸国，とりわけアジアにおいては，独自の文明の発達があったことが，明確に認識されている。アジアの経済発展，ひろくは，近代化について考える場合，西欧化という視点からではなく，文明化 (civilizaton) という視点からとらえる必要性を，すでにホブソンはここで示唆しているといえる。文明化の視点とは，一国の発展過程を，その国ないしその地域の有史時代のはじめから辿って分析するもので，西欧と接触した点をもって文明の始点とみなすものではない。価値多元論的歴史観であり，この考え方は，経済発展計画という将来にむかっての政策を立案する場合にも，立案者がとらねばならぬ考え方である。H・O・ハーシュマンは著書「開発計画の診断」のなかで，「開発計画のビヘイビアをその社会の構造的特性に照らし，あるいは，構造的特性と社会一般との相互関係に照らして考えることは，……ある国が自国の発展過程においてどのような種類の計画を取り上げ，どのようにそれを位置づけるかということが，その国の発展にきわめて重大な影響を与えるものだという考え方にわれわれを導くであろう。……たとえ要素賦存状態が『不適当』な国であっても，その国が『適当』な開発計画を見つけさえすれば，希望が持てるようになる。」(A. O. Hirschman,

"Development Projects Observed", The Brookings Institution, Washington, D. C., 1967〔邦訳：麻田四郎，所哲也「開発計画の診断」, pp. 8～9〕）すなわち，適当な開発計画を立案するためには，社会の構造的特質がまず明らかにされねばならない。構造的特質を明らかにするには，歴史への理解が必要であることは自明であり，ここに，経済発展論の研究にとっても，歴史研究が不可欠であるという根拠がもとめられる。

ところが，歴史専門家以外の者が手頃に得られる東南アジアの通史は，西洋史や中国史に比して数が限られる。経済発展論の概説書に較べても少ないようである。そのなかでもっとも包括的かつ標準的なものは，大著 D. G. E. Hall, "A History of South East Asia", London, Macmillan, New York, St. Martin's Press, 1955 (3 ed., 1970) をあげることができる。だが，より多くの人々にとって手近かなものとして日本語（翻訳を含む）で書かれた通史は第2次大戦後のものには数えるほどしかない。最近，河部利夫教授の「東南アジア史」の好著があり，またクセジュ文庫には，Lê Thanh Khôi; Histoire de l'asie du sud-est (Que sais-je? 804, 1967)〔「東南アジア史」（石沢良昭訳），白水社，1970〕がある。しかし，東南アジア地域の文明化の過程を，国際関係とのかかわりあいのなかで解明しようとしている点では，ここに取り上げるB・ハリソンの著作が，独特なものをもっているといえよう。

（二）

本書の構成は次のとおりである。

序
第1章　東南アジアの民族構成
第2章　古代インドと中国の影響
第3章　古代のインド化した諸国・扶南とシュリーヴィジャヤ
第4章　インドシナ半島のインド化した諸国
第5章　スマトラとジャワのインド化した諸国
第6章　イスラム教の伝来
第7章　ヨーロッパの進出
第8章　ポルトガルの世紀
第9章　オランダとイギリスの進出
第10章　17世紀のヨーロッパの会社貿易
第11章　18世紀の通商と抗争
第12章　新たな勢力均衡の形成
第13章　イギリスとオランダの権益の拡張
第14章　新しい植民地主義の始まり
第15章　資本と経済発展
第16章　人口と福祉
第17章　ナショナリズムの成長
第18章　東南アジアの新しい独立国

序では，東南アジアの概念規定及び地理的限定がなされる。東南アジアは，「政治的にも文化的にも1つの統一体をなしているとはいえないとしても，それには，社会構造を多くの点で共通にし，その過去の歴史と現在の政治とが，多くの類似点を示しているひとかたまりの国が含まれている。

地理的にこの地域は，かなりはっきりと限定できる。……つまり1つは東南アジア大陸部，あるいはインドシナ半島。……そしてもう1つは東南アジア島嶼部，あるいはマレイシア群島。……このように，半島と群島からできた北から南へ弓なりに走る陸地と，その間を東西に伸びる海路とは，陸路と海路の交差点をつくり上げている。」（訳書，p. 3）

陸路と海路の交差点であることから，「東南アジアは，いまだかつてどのような意味においても，他から切り離されている，あるいはそれ自体で完結している，1つの単位であったことはない。アジアの地図上でそれは交差点という位置にあるため，そこはいつでも，とくに外界の影響にさらされやすかった。東南アジアはある意味で，つねにそれ自身よりも大きい何ものかの一部分であった。それは歴史において受け身の役割，つまり全体としてのアジアの歴史を背景にして初めて意味と重要性をもつような役割を演じていた。」（p. 4）

そして受け身の地域の，文化受容の形態は……，「文化，商業，宗教は過去において，侵略的諸勢力と密接な相互関係をもっており，東南アジアは，つねにそれらの勢力を無視することを許されなかった。ヒンドゥー教，仏教，イスラム教，キリスト教の最初の伝来は，いずれの場合も，商業的事業と関連していた」。

この序文の部分に，本書をつらぬくハリソンの史観が要約されている。すなわち，東南アジアは「歴史において受け身の役割を演じていた」という視点である。この視点にたって，アジア全体および世界全体をながめているが，東南アジアとの接触の程度という点から以下のように，これら各章はいま仮りに3つの部分にわけることができよう。

第1部は，大航海時代直前までで，東南アジアと接

触する者は，インド人，中国人，アラビア人たちである。すなわち，アジア地域のなかの東南アジアの歴史で，第1章から第6章がこれに含まれる。

第2部は，大航海時代からポルトガル，スペイン，オランダ，イギリスなどの抗争，勢力変更がおこなわれた時代。すなわち，世界史（西欧を中心とする）の舞台に，東南アジアが登場し，列強の力の伸長が直接東南アジア地域に影響を及ぼす時期であって，第7章から第13章がこれにあたる。

第3部は，いわゆる帝国主義時代にさきだつこと40年，通商上の権益が，しばしば武力行使によって拡大される時代への転換期から帝国主義時代を経て第2次大戦後に至る時期。第14章から第18章がこれにあたる。（ただし，第18章は将来への展望がなされているにすぎないという意味で，エピローグとして切りはなして見ることができる。）

このなかで，古い未知な事柄を知る興味という点では第1部が面白い。また叙述は，第2部にあたる部分がもっとも生彩がある。第3部の叙述は，統一がとれておらず，改訂の余地が多く残されている。

（三）

ここで，各章の内容を逐次紹介することは，手近かに得られる書物の場合，余り意味がない。そこで，各章のうち，よく書けていると思われる章を指摘することを本評の主眼とし，残りの章は主な論点にふれるにとどめよう。

まず第1部。第1章では，重層的な民族渡来の歴史がのべられる。「ホモ・サピエンスの出現が決定的になったときから何千年もの間，アジア大陸から，東南アジア大陸と諸島部を通り，さまざまに変った型の人類が，次部を通り，さまざまに変った型の人類が，次から次へと連続して下って来た。この『南下』は，東南アジアの歴史においてくり返される，1つのテーマである。」(pp. 9〜10) 一応民族が定着したのちも，北方民族の南下は，東南アジア地域に脅威を及ぼした。中国の勢力の拡大がそれである。「東南アジアの文化史の型は，周辺のアジア地域の文化的諸勢力を下地として，その上に織り上げられる。……。秦の支配は一時トンキンにまで及んだ。が，紀元前210年の始皇帝の死とともに，この新しい帝国体制は崩れ去った。」（第2章，pp. 14〜15)。これ以降，中国の南下はその統一政権の確立とともに繰りかえされた。インドとの接触は，通商関係を通じて紀元前後ごろから活発化した。「東南アジアにおけるインド人の通商活動は紀元，1ないし3世紀の間にひじょうに活発化した。そして，通商活動に便のよい中心地に以前から建設されていた商人の居留地は，次第に富をきずき，団結力をつよめていき，ついに紀元4，5世紀にはそれらの居留地は，ほかから独立した，インド人が支配するインドの文化的，宗教的，美術的影響の中心地となっていたのである。……インド文化は，インドの商人たちがもっている，相対的にみて高い財力と威信のおかげで，この地域内のさまざまな地方に根を下ろしたのであった。」(第2章，pp. 17〜18)。「中国とローマ帝国の間に栄えた貿易，とくに絹の貿易は，2世紀にその最盛期をむかえた。……華南の諸港から，東南アジア，インドをしてヨーロッパへの長い海路もまた利用されていたが，中国人自身は，航海に出る十分な備えがなかったため，……海上貿易の主導権を，多く他国人にまかせていた。東南アジアのインド化した国々の海港は，中国貿易のための寄港地・中継港であり，これら諸国は，その富の多くを海上貿易からひき出していた。」(第2章，p. 25)。

第3章では，インド化した国家扶南の伸長と衰退，海峡においてもっとも有力な商業勢力として抬頭したシュリーヴィジャヤ，ポロブドゥールの大乗仏教遺跡をいまにのこす中部ジャワのシャイレーンドラ朝の伸長，850年の両者の結合が，描かれている。第4章は，クメールの膨張，タイ族の南下など東南アジア大陸部の歴史の記述である。次の第5章は，この地域の通商の拡大期をあつかっているという点で，重要な章である。「マラッカ海峡と東南アジア島嶼部は，12世紀に，著しい通商の復興を享受した。……〔それは〕南宋朝(1127〜1276年)下における中国の外国貿易の新たな拡大を反映していた。宋磁器は，アジアの多くの地域に，インドや中国，そしてアフリカ東海岸においてまでも，需要があった。……しかし，東南アジアのもつ大きな経済的資産といえば，それは，自然の産物であった。」（第5章，p. 47)。イスラム世界がアラブ人によって平定されたあと，十字軍による数次の遠征は，東西の貿易に全般的刺激をあたえた。このころから，ムスリム (Muslim) であるグジャラート人が，中東と東南アジアの貿易に指導的立場にたった。13世紀，インド貿易商人がイスラム教を受容するとともに，アラブ人から直接には受容しようとはしなかった東南アジアの通商港の現地人のあいだにも，イスラム教が急速に普及していった。このころ，東南アジア貿易は，ムス

リムが支配していたことは，第6章に次のように述べられている。「インド洋の海運は，しっかりとムスリムの手中に握られていた。アラブ人，ペルシャ人，インド人のムスリムの船が，ヨーロッパに，極東，東南アジア，インドの産物を供給しており，それらの産物は，アジアのさまざまな主要な商業中心地で集荷され，ペルシャ湾か紅海にむけて船積みされ，アレキサンドリアその他中東における集散の中心地に転送されていた。このような中心地からアジアの商品は，ヨーロッパ全域に出荷されたのであった。主として——14世紀以降は——，東地中海各地に多数の中継地をもち，アジアの物品がヨーロッパに入るルートを支配していたヴェニスの商人によって。」（p59)。東南アジアでは，「15世紀が終るまでにマラッカは東南アジアの指導的商業勢力としての地位を完全に確立していた。」（p.66)。しかし，そのころヨーロッパでは，「もしアジアの物品を，一度船積みしたらそのまま直接ヨーロッパの諸港へ運ぶことができたなら，それは，明らかにヨーロッパにとって非常な利益をともなうであろう。」（p.59)。という欲望が高まってきていたのであった。

（四）

第2部にはいり，第7章では，まず，マラッカの繁栄がえがかれる。「マラッカは，『1つの季節風が吹き終って，別の季節風が吹き始めるところ』であった。」（p.67)。「そこは，東南アジア，中国，インド間の3角貿易の中心であった。さらに東へ行くと，バンダ諸島に，香辛料貿易の2次的な中心があった」。（p.68)。

15世紀の地理上の大発見ののち，16世紀初頭には，ポルトガルがインド洋の制海権を得る。1510年に，インド西海岸の海港ゴアを占拠したあと，1511年8月，マラッカを奪取した。ポルトガルの植民地経営の方針は次のとおりである。「ポルトガル帝国は，要塞制度をその本質とした。それは，少数の戦略基地に，商業権と海軍力を集中することによって維持することができたが，それらの基地は，アジア内部の土地や人民ではなく，外海を監視するために置かれていた。」(p. 74)。第8章では，ポルトガルとスペイン間の抗争。植民勢力に対するアチン人をはじめとする現地人の抵抗がえがかれる。「アチン人は，マラッカにいる彼らの共通の敵ポルトガル人に対して，半島部のマラヤ人と共同作戦をとることを期待されていたにもかかわらず，そのような事態はおこらなかった。ポルトガル人に対するムスリム統一戦線は存在しなかった」。(p. 88)。本章では，アジア貿易によるポルトガルの利潤源の記述（p.90）が興味をひく。利潤源は，主たるものは，ポルトガルと東南アジア間の，国家独占による直接貿易であった。加えて，副次的なものとしては，アジア域内貿易への介入をめざし，マラッカ港へ域内貿易船の強制入港を試みたこと。ムスリム商船に対する海賊行為。弱小首長からの貢物が資金源であった。しかし，商業国家が，商業原則にもとづいて行動しなかったことからくる矛盾が露呈しはじめていた。「十分な給与と管理の欠如は，腐敗と私貿易業を大々的に発達させ，そのことが今度は，行政を改革し，活気をとりもどすことを可能にしたかも知れない資金を国王から奪い去ったのである。」(p. 91)。また他方軍事的には，「主要基地としてマラッカをもつ彼らは，モルッカ諸島の搾取にのみ専念していて，ジャワを無視した。ほかのヨーロッパ諸国が，スマトラかジャワに地盤を得ることができたら，その国は次にモルッカ諸島へ，自由に進出できるような状態だった」。(p. 92)。

第9章は，スペインの艦隊がイギリスによって破られた（1588年）後の，オランダによる東南アジアへの進出がえがかれる。イギリスは，東南アジア島嶼部への進出はオランダによってはばまれたため，インドの経営に専念した。第10章は，1641年マラッカのポルトガル人を降服させ，オランダがマラッカ海峡の制海権をにぎることになった時期があつかわれる。ここで植民地経営上注目すべきは，「モルッカ諸島では，ポルトガル人を追放し，1623年にイギリスの競争を排除してから，オランダ人は，貿易権を，市場取引と配布ばかりでなく生産をも支配する権利へ変質させ始めた」ことである。(p. 119)。

第11章は，17世紀から18世紀をあつかっているが，ここでは，オランダによる商品作物の強制供出制度（leveringen）のメカニズムを述べている点が重要である。海運業からの収益の減退の結果，「オランダ人は，中継貿易の政策から農業開発政策へと転換した。……レヘント〔領主〕たちは，強制された価格で，会社に一定量のコーヒー，コショウ，あるいは棉花を引渡すよう要求されたし，政治的支配が確立している地域のレヘントはまた，その領内の産物を貢納という形で遠慮なくとりたてられることになった。……。この制度下でレヘントは，二元的な地位を獲得した。彼らは，依然として司法権，行政権を併せもつ自分の領地の公認の支配者であったが，同時にまた，オランダの会社の商業代理人，すなわち会社の道具になった

のである。彼らは，必ずしも道具になるのをいやがらなかった。強制供出制度は，会社とレヘントの間を共通の経済的利害で結び，両者がジャワの農民を搾取するにあたって，協力者として連携するようにしむけた。……。こうして，ジャワにおいてますます広い領域が，オランダの商業目的のためだけに奉仕するようになった。しかし，たとえこのことが，村落経済や，農耕のバランスを乱すことになったにしても，その影響は，余り深いものではなかった。その影響は，社会組織，法，慣習など本質的な枠組には達していなかった。農村地方の慣習法は，オランダ人がそれに干渉する必要がないという理由から手をつけられていなかった。」(pp.134～137)。この章では，ほかにヨーロッパの文化的影響，華僑の進出，それに対する1740年オランダ当局による迫害。フランスによるヴェトナムへの進出などがえがかれ，重要な章となっている。第12章では，1784年，イギリス・オランダ平和条約の調印により，モルッカ諸島をも含めた東南アジア島嶼部全域にわたる貿易の自由の公式承認を，イギリスが得，工業国として成長しつつあるイギリスが熱帯の原料を要求してくる時代がえがかれる。次の13章は，1811年から16年のイギリスによるジャワ領有，ついで，1819年シンガポール領有。1824年のラングーン陥落など，イギリスの勢力が伸長した時期にはじまる。しかし，オランダも抵抗し，1816年，イギリスは，オランダにジャワを，18年にマラッカを返還した。その後，1824年には，イギリスがスマトラ及び周辺の島々から勢力を撤退すると共に，オランダは，シンガポール以北及びインドから撤退するという約束がなされた。本章は，イギリスの統治政策とオランダの統治政策が対照的にえがかれている点で，本書においてもっとも興味深い章である。イギリスは，直接課税の経済政策とむすびついた直接統治政策をとった。農民を封建的束縛や強制栽培の負担から解放し，地価を基準とする金納地代を基礎とした収税体系を確立するためにジャワに貨幣経済の導入をめざした。これは，イギリス商品の販売に好ましい条件をつくるためにほかならない。しかしその結果は，「強制労働から解放されたジャワ人小農民は，彼の家族を養うのに必要なもの以上はほとんど生産しない傾向があり，地税の支払いに必要な金銭は，すべて借金にたよっていた。ジャワにおける新しい経済政策の効果は，農民を，その封建的な王族の主人たちの手中から中国人，アラブ人金貸しの手へと引渡すことにあらわれた」(p. 190) ということになってしまった。そのためオランダは，1818年に，ヨーロッパ資本による農園の開発を無制限に許可する準備をしたのち，直要的強制栽培制度を復活し，ヨーロッパ市場向け生産を確保するのである。かくして，プランテーションが拡大し，それにともなって，1850年以降，人口も急増していくのであった。他方，政治面では，イギリスは民族の歴史や慣習を学び，統治にあたる民族に対して善意をいだいて接するという，新しい方式をしめしたが，イギリス本国の利益を自分が優先していることにきずかない場合には，いかにそれが，被支配民族にとっては，不利益な結果になるかが示された。戦後「みにくいアメリカ人」といわれた原型が，この時期にすでにみられるのである。

(五)

第3部では，植民地化の過程がまず第14章でえがかれる。本章は，武力による領土割譲の過程がなかなか克明にとりあげられており一読にあたいする。しかし，帝国主義の侵略の本格的な時期をあつかった第15章，人口問題をあつかった第16章，第2次大戦前のナショナリズムの萌芽をあつかった第17章，戦後の独立をあつかった第18章は，記述がスケッチ的であり，歴史の動因との関連づけがなんらなされていない。したがって以下は，取り上げる必要はないであろう。例えば，「東南アジアの島がこれほど人口の急増をみたのはなぜだろうか」という疑問に対し，第16章は，何ら内的メカニズムを明らかにした解答もあたえていないのである。

以上，本書のなかで，経済発展論に関心をもつものの眼から興味のある点をひろいつつ，本書を論評してきた。その観点からは，第2部，第1部の順に興味があり，第3部は読むにたえなかった。これは，第3部の時代は，われわれにとって比較的知識が豊富な時代であるということにも確かに原因しているのであり，歴史家の目からは，他の部にも多く誤りがあるであろう。訳者は，訳注で，そのいくつかを指摘しているが，そのほかにも，たとえば，「スエズ運河の開通は，米のために広大な市場を生み出し，その結果，米穀生産をひじょうに刺激した。」(p. 204) という記述がある。この記述は通説であり，誤りとはいえないが，本書が通説にのっとってのみ書かれており，したがって通説自体にもう一度検討を加えてみるという過程はなされていないという限界を示している。それゆえ，より専門的には，Cheng Siok-hwa, "Rice Indu-

stry of Burma 1852—1940", Kuala Lumpur Univ. of Malaya Rress, 1968 などの異説にあたって，事実の価値判断を再検討する必要があるだろう。

また，第3部以降が，とくに失敗しているというのは，先進国の進出の事実はあげられていても，先進国のどのような政治的・経済的要因によって，その政策がとられ，そして，東南アジアに影響をおよぼしたのか。また，その事件が，先進国の政策に対してどのような修正をせまることになったかの，統一的な記述が欠落している点である。この欠落は，本書のように，国際関係を中心に東南アジア史をまとめている場合，致命的な欠陥である。しかも，あつかう時代が先進国と東南アジア地域との関係が密となった第3部で，それが欠落していることは，二重の欠陥であるといえよう。

最後に，本書の訳者も述べている如く，本書の特徴である，「受け身の歴史」として東南アジア史をとらえる方法は，逆に「東南アジア社会の内的な発展を把握する面がよわくなっている」(p. 278) という点をやはり，指摘しておきたい。この欠点は，東南アジアの経済発展，ないし，ひろくは近代化の方策を模索するために，文明化の歴史をまず知ろうという立場のものには不満足な点としてのこる。著書は，マラヤ，香港など東南アジアの各地で教鞭をとる人であり，その点，今後新しい視点が期待できるかも知れない。また，東南アジアの出身者によってすぐれた通史がかかれるであろう。しかしそれまでは，不満は残っても，本書は，標準的通史のひとつとして意義をもつことに，まちがいはない。

(1973. 8. 4稿)

〔唐木　圀和〕